

# INTERVIEW

## 「多国間主義の流れで 核軍縮の実現を」

### 上智大学教授 猪口邦子氏に聞く



(いのぐち・くにこ) 米国エール大学大学院博士課程修了、政治学博士。行政改革会議委員、男女共同参画会議議員などを経て、昨年4月までジュネーブ軍縮会議代表部特命全権大使。『戦争と平和』、『ポスト覇権システムと日本の選択』、『戦略的平和思考』などの著書がある。

昔の戦争は、和平協定の調印で戦火が収まった。けれども今は、その後も果てしなく続く。猪口邦子教授は今のこのような戦争を、「根の深い戦争(Deep-Rooted Conflict)」と呼ぶ。「この問題の解決には、和解のプロセスが必要となる。しかし紛争の当事者が身近に非合法の武器をもっていれば、その人は和解のプロセスには参加しない。武器を使って、もっと簡単に事を片づけることができるからだ」と分析する。

同氏はその和解への出発点として、小型武器軍縮の実現に奔走し、国連会議を成功させ、国連総会での決議案の全会一致採択にこぎつける。さらにこの多国間主義をもとに、核兵器生産禁止から本格的な核軍縮までを射程に入れる。昨年春まで、軍縮会議日本政府代表部特命全権大使として活躍した猪口邦子教授が主張する戦略的平和思考は、着実に実を結びつつあるようだ。

また同氏は、日本のプルトニウム利用について、「世界から見て危険な日本というのは、資源制約の中で非常に窮地に陥る状態のことだと思う。だから日本が恒久的に安定したエネルギーを入手していくということについて、世界は非常に寛容だと思う。またエネルギー逼迫が予想される中、プルトニウムを安全に管理できる国は、それをエネルギー源として活用するのは当然だという立論が必要」と指摘する。

ここでは国際政治学者として活躍し、またそれを実践してきた猪口邦子教授に、軍縮やエネルギー、そして男女共同参画問題について話をうかがった。

聞き手 近藤吉明・原子力学会誌編集長  
三菱商事 重電機ユニット

**「今日の世界で、最大の殺戮をもたらしているのが小型武器。年間で50万人が亡くなっている。この小型武器の軍縮をまず、国連プロセスで推進し、多国間主義の流れをつくった」**

**「核兵器の生産の禁止ならば不平等ではない。だからインドやパキスタン、イスラエルがこの条約に加入しないという口実を与えないことになる。これが究極的にNPTを側面強化することにもなる」**

高校時代の恩師の生きる姿が、  
国際政治に関心をもつきっかけに

子どものころは、どんなでしたか。

猪口 本を読むことが好きでした。また人と話して、その人がどういうことを考えているかというのを発見するのが好きでした。10歳の時に父は家族を連れてブラジルに赴任しました。この時に異なる環境に適応したり、子どもなりに文化の境界線を越境したり、いろいろ考えることが多かったように思います。

政治学、そして戦争に興味を持たれたきっかけは。

猪口 帰国後に入学した桜蔭高校で国語を教えていただいた担任の赤星秀子先生との出会いが、戦争と平和の問題を生涯の仕事にしていきたいと思うようになったきっかけです。その先生は後に、その高校の校長先生を長く務め、私が大使に赴任して3週間目に亡くなりました。先生の授業はすばらしく、当時としては最高の文学者に思えました。

桜蔭では、卓越した才能をもった女性の先生たちが、女性であるがゆえに社会的な可能性が剥奪される中で、その高い才能を女子の次の世代の教育に託していくという、ある種、先生と生徒たちの密約みたいなものがあったり、教えられた方はその後、より広く深く学術を深めるといったバトンを渡されたという、みんなが思っていたと思います。私は赤星先生が夫を戦争で亡くしながらも、戦後生き抜いたその迫力を伝えて

くれたこと、そしてその先生の人生を悲劇にした戦争について、考えを深めなければならないと思ったことが、この道に進むきっかけになりました。

外人記者も先生の英語力を抜群だと賞賛していますが、少女時代にブラジルで過ごされたせいですか。

猪口 いいえ、努力しているからです。私は毎朝、ヘラルド・トリビューン紙のフロントページを全部、音読する。これはとても効果的です。インタビューをうけることも多いので、その日のニュースについてのピシッとした言い方が、その時にインプットされます。また大使の時は毎朝、条約を暗記するトレーニングをやりましたから、相手がファイルを見て何ページだったかな、などと探している間に、たまたまかけることができる。だから心理的に、有利な立場で交渉に臨める。語学力にたけるのは、国際政治をやっていれば責任です。もちろん発言の内容が一番重要であり、そのための準備は相当します。

努力の末、国連で小型武器軍縮の  
文書を全会一致で採択

軍縮大使時代に、国連で小型武器軍縮の文書を2003年7月に全会一致で、採択に持ち込むことができた。そのような難しいことがらを、どうやって実現されたのですか。

猪口 世界では小型武器で年間、50万人が亡くなっている。今日の世界において、特定の武器で人が戦争関連の死を遂げてしまう最大の範疇が、小型武器です。小型武器というのは一人で操作できるもので、カラシニコフと呼ばれるAK 47という自動機関銃から、肩に背負う地对空ミサイルまである。小さいものだから、みんな余りそれを重視しない。けれどもこれこそが最大の被害をもたらしている。そういうエフェクトベースで物事を考えなければいけない。だから小型武器軍縮をまず成功させて、そして多国間主義を復活させていくきっかけとしよう

いう思いがありました。

そのプロセスでは、内戦国のような被害国を大事にするということに努力しました。小国の被害国は、国連は自分たちのために助けになったことはないと思っているので、全く信頼できないと思っている。議長としては大国だけを相手にするのではなく、小さな国々に対してもすべて調整過程を持った。そうしたら彼らから、自分たち小国の意見をきちんと聞いてくれることまでしてくれる日本こそが、本当の大国だと言われた。日本のプラスイメージを世界に示すことができたと思う。もっともそれを実行するためには、体力はもう無限に近いほど必要だった。

私のねらいはまず小型武器、次に対人地雷において、そういう被害国の声を聞かなければならないという流れをつくること。方法論についての考え方を世界に認めさせたことにあった。だから今度、核軍縮については、日本の言うことを聞かなければならないという流れに持っていくことができたわけです。そこにつなげるといのが、長期的な戦略です。戦略的平和思考というのは、平和への道筋は戦略的に運ばなければいけないということです。

不平等ではないから、核兵器生産禁止への政治合意はできた

猪口 外国間核軍縮・不拡散条約としてはNPT(核兵器不拡散条約)がありますが、私の考えでは、次なる核軍縮の流れというのは、核兵器の生産そのもののすべての国による禁止です。これだと不平等条約の構造がなく、すべての国でそれが禁止される。だからインドやパキスタンなどに不平等条約を口実としてこの条約に加入しないという道を与えないことになる。これが究極的にNPTを強化することにもなる。戦略的検討に相当な時間をかけたアメリカも、昨年7月にイエスという答えを持ってきた。アメリカは9・11以降、核テロが怖い。だからその確率を下げなければならない。そのためにはまず、その量を少なくすること。量が多ければ、管理がどこかでずさんになる。だからこれ以上、核兵器の絶対量をふやさないと、万人の共通利益となる。

ロシアの核弾頭の高濃縮ウランをロシア国内で低濃縮ウランにしてアメリカが買い取るメガトン・ツー・メガワットというプログラムがある。これが2013年まで続く。現在、2万発のうち9,000発近くの処理が終わっているところです。ロシアのように、高濃縮ウランをもっている大国の管理がきちんと行われているかどうかという懸念がある。

猪口 大国だからきちんと管理しているとは限らない。NPTでは非核兵器国が核兵器を入手せず、かつ平和利用の権利を持つということに関する実施機関として、国際原子力機関がある。けれども核兵器国が誠実に核軍縮を遂行しなければならぬことを監視する、要するに核兵器国の義務に深くかかわる6条の部分に関する機関がない。だから核兵器国が核軍縮に誠実に取り組んだかどうかをチェックする方法がないし、査察もうけない。実施体制は非常に不十分です。

うらみに根ざす紛争は、戦争終了後も続く

国際テロを含めて、戦争を根絶するために、国連や日本はどういうふうに進めばいいのでしょうか。

猪口 テロを完全になくすことはできないけれども、確率を少なくしていくことはできる。テロは戦争に巣食うので、戦争をなくしていくことがまず大事だと思う。冷戦後、なぜ戦争が繰り返すのだろうか。それは戦争の終わらせ方が間違っていたからです。だから再発するし、同じ地域で再発しなくても、類似の構造を持った戦争があちこちから出てくる。

以前の戦争は特定の政治目的や覇権、あるいは領土がらみのものであったのに対して、冷戦後の戦争は、非常に深い恨みに根ざしているのが特徴です。民族紛争や宗教対立の背景には、非常に深い恨みがある。だから戦争が終わっても、殺戮が終わらない。ではそういう恨みに基づく根の深い戦争というのは、どういふふうにならざるか。その方法を、世界はまだわかっ

「世界から見て危険な日本というのは、資源制約で非常に窮地に陥る状態のことだと思う。だから日本が恒久的に安定したエネルギーを入手していくことに、世界は非常に寛容だと思う」

「エネルギーひっ迫が予想される中、プルトニウムを安全に管理できる国は、それをエネルギー源として活用するのは当然だという立論が必要」

てない。だから戦争が次から次へと起こって、そしてテロリストがそれに乗じていく。

恨みに根ざす戦争をディープ・ルーテッド・コンフリクト Deep-Rooted Conflict と言うが、このような戦争を終わらせるには和平協定だけでは不十分です。昔の戦争だったら、和平協定を政治指導部同士が調印すれば、翌日には戦火が鳴りやむ。けれども今は、それに関係なく、次の日だって同じような様相が続きます。だから解決のためには、和解のためのプロセスが必要になります。その和解のためにはどういう要素が必要かということ、日本は考え抜かなければならない。

#### 非合法の武器があれば、人は和解のプロセスに参加しない

猪口 私の経験から申しますと、和解にはいろいろな要素を組み合わせなければならない。けれども、自分の身近に非合法の武器がごろごろしていれば、要するに武器を使った、もっと簡単に事を片づける方法があれば、人は和解のプロセスには参加しないということです。ですから非暴力的な対話やお互いを許し合うという、そんな大変なことは、暴力的に簡単な手段があったら成立しない。だから小型武器の非合法拡散の根絶、これが和解の出発点となるのです。

もう一つは、真実をお互いに見詰め合わなければならないということ。例えば南アフリカでは、黒人と白人が和解して融合政府をつくりました。その時彼らは、真実と和解委員会というのを立ち上げている。そこで、白人はこれまで何をやってきたかというつらい内容を、黒人といっしょになって見詰めていく。その中で、許し合うということまで行かないかもしれないけ

れども、ある種の未来をともに見るプロセスができてくる。その結果として、平和にもなる。南アフリカは核兵器を持ってはいたけれども、それを自分で解体した背景には、そんなことがらも関わっている。

日本が今なすべきことは、安保理常任理事国になった時に、日本は安保理の決議案に可能な限り広く軍縮・不拡散の項目を入れる。和解プロセスの構築も指導する。日本が安保理に入ったら、どう安保理が変わるのかということを示すことが重要だと思う。戦争を本当に終わらせたいという主張を、日本の自らの歴史と履歴から、迫力を持って世界に伝えるようにした方がいい。

#### 資源に乏しい日本が安定したエネルギーをもつことに、世界は寛容

プルトニウムについて。今まで日本は国内で再処理したものを5トン、海外で再処理したものを35トン、計40トンを持っている。高速炉で燃やすという計画も、また軽水炉で燃やす計画も、うまくいってない。一方で六ヶ所村では、これから再処理を始める。それで日本にはプルトニウムがどんどん蓄積する。海外から見れば、核兵器の材料になるものを相当量持っている日本はいずれ、核武装するのではないかという疑念が出てくる問題をどうお考えですか。

猪口 世界から見て日本が危険だというのは、資源制約の中で非常に窮地に陥っていく日本の姿だと思います。第2次世界大戦はそういうふうにして始まったという歴史の理解がある。だから日本が恒久的に安定したエネルギーを入手していくことについて、世界は非常に寛容だと思う。ですからプルトニウムはエネルギー源として必要であり、これは再利用できる。ある意味では究極の答えとなりえます。エネルギー逼迫に対する安全弁というふうに理論化するべきです。国際政治の観点から考えると、具体的な戦争の可能性は、そういうことが一番重要な要

**「女子を登用しない業界は、半分の才能しか生かしていない。半分の才能でやる社会というのは、両方の才能を使っていく社会に必ず負ける」「世論は最終的に、本当にアンフェアなことは言わない。マスコミにしても誠実に向かい合っていれば、陥れたりするような言説が仮にあったとしても波及しない。そこにはフェアネスがある」**

因となる、理念的な理解よりも。エネルギー逼迫は今後、化石燃料を中心に途上国の急成長を前提に相当大変な局面に入りますから、プルトニウムに関する非常に徹底した安全管理が可能な国は、それをエネルギー源として活用するのは当然であって、そういう立論が必要だと思います。

アメリカでも最近、再処理してプルトニウムを使うべきだという主張が高まってきました。

猪口 本来のエネルギー政策は高速増殖炉へつなげるということなので、そこをもう少し政策としてはきちっと検討する必要があるのではないかと思います。日本は無資源国として、他の国を圧迫せずに、しかし発展の権利を確保していくという観点から考えるべきだと思う。それは国際政治の安定に寄与することであって、プルトニウムをたくさん持っている核兵器をつくるのではないかという疑惑をかけられるようであれば、国家としては絶望的です。それだけ信頼がないということであって、もし政府間においてそんなことを言われたら、それはもう外交の破綻です。そういう不信感を払拭するためにも、ほかのすべての武器分野でも、軍縮の旗手にならなければならない。小型武器でも対人地雷でも。日本は軍縮については本気なんだと、そういう総合的なイニシアティブをとる中で、信頼を受ける。そうすればその国がプルトニウムをたくさん持っていたとしても、そういうことは言われません。

女性を生かさない業界は、半分の才能しか使っていない

原子力学会も男女共同参画学協会に加盟していますが、会員約7,300人中女性は170人で2.3%にすぎません、男女共同参画についてのお

考えを。

猪口 男女平等を進める会議が内閣府の中にある、制度は充実しました。けれども実際上は、間接差別や事実上の差別が残っている。原子力業界でもぜひ、専門性の高い職業における女子の登用を積極的に推進してもらいたい。科学立国である日本では、女性の科学者が少な過ぎる。あらゆる方法でそれを改善してほしい。例えば原子力関連の研究所等でも、保育園を設置してほしい。これで多くの職員が、ずいぶん助かる。

また女子は、時代の女性観を超える本当の支援者が一人でも近くにいると、伸びる。この学会誌も、自分はそういう人になってやろう、何と言われようと君はそれでいいのだ、それを信用してやるから頑張れというような人の役割を果たしてやろうという読者がいると願っている。職場の上司にそういう人が一人でもいれば、たぶん女子は強くなれる。けれども今の世の中では、周りが向いていないだとかいってディスカレッジする。そういう中では、本当の才能がそこに行かない。だからその分野では、人口の半分の才能しか活かさないことになる。半分の才能でやる社会というのは、両方の才能を使っていく社会に必ず負けま

市民は成熟している。誠実に向かいあえば、信頼は得られる。

原子力では、事故がときどき起こります。学会では、緊急の情報を出したり声明を出したりしているが、後手に回ることが多い。美浜事故については学会の秋の大会で公開討論開会が開催され、その様子を学生連絡会が取材し、すぐ学会誌に掲載したり、別途専門家の座談会も記事にしています。学会から社会への発信はさらに、どうすればいいと思いますか。

猪口 事故が起きたら、当事者たちが誠実に向かい合う。何かを隠蔽し始めたと思われた時に、信頼関係が瓦解する。市民の側には、もともとそういう先入観が過去のことからある。非常に閉鎖的で、保身的で、何かまずいことは外に出さないように。また日本には、国民が知ると不要に不安感を抱くからという変な論理がある。これは失礼で間違った考え方で、主権者である国民はすべてを知る権利があるわけです。それをあなたが知ると不安になるからあなたには言わなかったというのは、実に反民主的な愚民政策に近い。

日本の市民社会というのは、十分にインテリジェントです。世論が間違ふことってめったにない。一部の週刊誌の暴走ということがあってもいいけれども、私の長年の経験からすると、世論は最終的に、本当にアンフェアなことは言わない。私も多くのマスコミから取材を受ける中で、そんなに変な扱いを受けたことはありません。誠実に向かい合っていれば、その人を陥れたりするような言説は、仮にあったとしても波及しない。そこにはフェアネスがありません。

一方で原子力のコミュニティーと市民との間の不信感は、かなり長年にわたるものがあります。ここは市民が先入観を持ってそういう目で見て、彼らも本当に間違っているのではなくて、やはりそう言われても仕方がないような過去の履歴があったということです。

その履歴を消すことはできないけれども、これからそういう不信感を払拭するための新しい履歴をつくり始めることはできます。そういう決意をして、事故があった時に、不安に思っている周りの住民たちに対し、きっちりと向き合っ、誠実な態度で、情報隠しをせず、またそのような印象が残らないような誠実な態度で臨む。そのためにはスポークスマンを持ってもいいと思います。



学会員へのメッセージがありましたら。

猪口 自負を持って誠実に、そして社会規範性を持って、世界最高水準の仕事をしてもらいたいと思います。競争力ある仕事をしてもらいたい。この国がジリ貧になってほしくない。そうならないための重要な部分を、皆さんには担ってもらっている。そういう自負と、民主主義という政治理念の理解を深め、社会規範性を持ってお願いしたい。また社会学者と交流するのは、新しい流れが見えて有意義かもしれません。また現場を日々担う方々の話を聞いていくというのも重要ではないでしょうか。

先生の研究室でインタビューさせていただき、先生のお人柄が大変よくわかりました。お忙しいところ原子力学会のために時間をさいて頂きありがとうございました。

< 編集後記 >

週末には仕事を持ちかえらないという猪口教授。そのために平日の5日間は、シビアな生活になると聞いた。「そんな中でも、生活者としての余裕をもちたい」ということで、先生の研究室の真ん中には、きれいな花がいけてある円卓がある。そこで先生は、訪れる学生や研究者たちに、煎じ茶をふるまいながら、円卓の騎士よろしくいろんなお話をされるという。私たちもその煎じ茶をいただきながら、興味深いいろんなお話をうかがうことができた。  
(近藤記)

(取材協力：澤田哲生編集委員，佐田 務編集委員会諮問委員)